

十四時間目

その日の夜明け前、轟音と激震が校舎に走った。
しかも複数同時に、である。

——払暁奇襲か!?

俺は司令部（に改装した元職員室）へ駆け込む。

すると、既にマリオン、通信当直の【娘】、《シシオウシステム》当直の【娘】で、合計三人が緊迫した雰囲気を漂わせていた。

そして、通信当直の【娘】は状況を掴んでいたらしい。俺の顔を見た瞬間、報告をする。

「《蓬萊会》の攻撃です。おそらく、携帯ロケット弾か何かかと」

「確認を急げ。ただし、被害状況の詳細を優先だ」俺はその【娘】エムスリーファイブに言う。「いや、ちなみに何発食らった？」

「多分、三十発程かと……」

報告は正確に！——という言葉俺は呑み込んだ。こここの設備ではこれが限界だろう。

「それで、被害者は……零ゼロです」

その声には喜びと共に驚きがあった。

「間違いないな？」

「はい。校舎への被害はともかく、ドクター及び各ヴァイタルスーツからの信号に異常はありません」

この言葉に司令部常駐のマリオンは「見りやわかるでしょ」と小声で呟いた。

「となると、これは脅しだな」

俺は断定した。欺瞞情報の可能性は低い。エムスリーファイブも同じ事を考えたろうが、連中の性質からして、高度な欺瞞情報を作れるほどの技術は無い。ならば、攻撃は実在し、かつ現実には負傷者は皆無だったのだろう。

「全員に所定の配置へ付けと命令しろ。多分すぐに本命が来る」

「りよ、了解」

三十発程もロケット弾をぶち込まれて、被害者が零ゼロ。これが偶然の訳がない。おそらく《蓬萊会》が【娘たち】を傷つけまいと細心の注意を払って、撃ち込んだに違いない。
しかも

『korehasaisyuukouhukukannkokudearuhazimenittteokugakoregakimitaniaetareruserusa』

という日本語が響いてきた。

一応エムスリーファイブが翻訳してくれる。

「これは…：最終降伏勧告です」

「ああ、わかっているよ」

これまでも『降伏勧告』自体は何度もあった。幾らなんでもその程度の日本語は理解できるようになっていた。

しかし、『最終』がついたのはこれが初めてだ。

だから、俺はマリオンに問う。

「いいんだな？ 《蓬莱会》の連中だって、殺し合いがしたいわけじゃないんだぞ」

俺が指揮官なら、マリオンは司令官だ。この決定は彼女にしてもらわねばならない。

しかし、マリオンは相変わらずだった。

「当然よ。あんな奴らに…：」

「マリオン、この【娘たち】が何物にも代え難い価値を持っているのはわかる。とりわけお前にとっては己の命よりも優先すべき存在だろう。だからこそ、その価値を守るための降伏もありえる」

「何を今さら…：」

「本当にわかっているのかと聞いているんだ」俺はややしつこく問いを重ねる。「人間は流れ弾一発で簡単に死ぬ。そうなってからでは遅いんだ。今日まで鍛え上げてきた手足が引き千切れてから、悔やんでも取り返しは付かない。脳や脊髄を損傷すれば、美しい顔も醜く歪む。唾液や糞尿をだらしなく垂れ流して、意味不明な妄言を繰り返すだけの人生が待っているかもしれない」

俺はこの会話を【娘たち】全員に向けて流していた。

「…：」

「ここで降伏すれば、そういった事態は避けられるだろう」

そして――。

「構わない。あたしは戦う」

やはり、マリオンは頷いた。

「…：卵子提供者になった頃のあたしはいつも片意地を張っていた」

唐突にそんな事を言った。俺にはない。娘たちに向けて語っている。

「実力で地位を手に入れた自負があった。でも、周りは皆年上の学者ばかり…：だから、絶対あたしを上司と認めてくれない。だから、常に実力を示し続けなきゃいけない。」

周りは皆ライバルだ……と思っていた……」

「子供の発想だな」俺は指摘する。

「ええ、そうよ。実際、齢十六のあたしは周りに支えられていた。小娘に偉そうにされて腹を立てる人もいたけど、それは幼く危なっかしい小娘を守ろうという善意と紙一重でもあった。けれど、あたしはそれに気付かなかつたし、認めようもしなかつた」

その時、ちょうどエムイレブンが司令部に入ってきた。

しかし、マリオンは一顧だにせず、決意と結論を語る。

「だからこそ、あたしは道を支え示し続けたい。一人の母親としてではないわ。あたしのプランに関わった無数の父母すべての長として。この役目を譲る気はないわ……！」

——扇動家め……。

俺は内心舌打ちしていた。

一顧だにされなかつたエムイレブンが、しかし、マリオンの言葉に陶醉している。この容子では「娘たち」全員が似たり寄つたりの有り様だろう。

もう、俺が何を言っても、この流れは変わるまい。

「……了解だ。では、蓬莱会へ拒絶信号を送れ」

俺は渋々二通りの言語と、拡声機と三通りの周波数——計八通りの手法で拒絶の意思を示す（勿論、後々の事を考え、記録は取つてある）。

すると、校外では無数の男たちが喚き出した。

「「力なき同胞のために！」」

「「力なき同胞のために！」」

「「力なき同胞のために！」」

多くとも千には及ぶまい。それでも、壮観な光景だった。

「同胞とは、これまた醜悪ですね」エムイレブンが呟いた。「国籍や民族で人間の価値に差を付けるなど……。彼らの様に大の大人になる機会すら、与えられなかつた者も多いというのに……」

「……ああ、そうだな……」

——だがな、弱者というのは醜悪なものだよ。

俺は金髪碧眼の美少女を見ながら思った。

いわゆる『薄幸の美少女』など、存在がそのもの矛盾している。美少女は美少女であるというだけで、強者である。その美貌で生きていけるからだ。幸薄いなど、ありえない。これは先に述べたように美貌が健康な肉体を意味するだけではない。仮にアフリカの貧困国に生まれようとも、美少女でさえあれば、欧米先進諸国でスーパーモデルとして成功し、

億万長者になりえるからだ。

逆に弱者とは醜悪なものだ。これも前述の通り、弱いからこそ、栄養失調や戦争被害を免れえず、失明や不具に至るからだけでない。適切な体調管理ができないというだけでもない。その醜悪さ故に成功の機会がつかめず、ますます弱者へ転落するというだけではない。

弱者とは心まで醜くなるものだからだ。

俺はミナが唯一泣き顔を見せた日の事を思い出した。

ミナは合衆国軍人だったから、何だかんで難民保護なども行っていた。とりわけミナは『懐柔要員』でもあった。だから、武器を帯びず、軍人と明かさず、ただただ難民の命を救うため、食糧配布に勤しむ事も多かった。が、そこで貶される事もまた多かったらしい。覚悟はしていたはずだ。難民が食糧を配る難民支援者に「もっと食糧を寄越せ」「灯油の分け前が少ない」とあたるのはよくある事だからだ。……もつとも、戦火が近づいてきた時、その苦労を共にしてきたはずの現地の仕事仲間に、「どうせ、ミナは危なくなったら、アメリカに帰るんだろう……？」となじられた事はさすがに衝撃だったらしい。

あの時、俺は涙を流すミナに言った。それが人間なのだ——と。神ならぬ人の身の限界なのだ——と。思い返してみれば、俺はあの秋田と似たような事を言っていた気がする。難民だった彼らも、平和な社会にいれば、礼節や品性を具えていたはずだ。だが、戦火や貧困がそれを奪った。それだけの話だ。悪いのはお前でも彼らでもない。悪いのは戦火であり貧困だ——と。

ミナはこの金髪碧眼美少女達にその事を教えなかったのだろうか？ 教える前に死んでしまったのだろうか？

「……」

だが、次の瞬間、さらに爆発の衝撃が走る。

さすがに皆覚悟が固まっているので、すぐに状況確認を始めるが、

「こ、これは……」

エムスリーファイブが監査装置の情報を混乱していたので、俺が口を挟む。

「蓬莱会が指向性爆薬で壁を撃ち抜いたと見るべきだな」

「そんな、貫通箇所は八か所もあるのですよ」

「なら、その八か所から同時侵攻されている。屋内への侵入手法としては操典通りだよ」

「……たしかに敵が校舎に侵入しています！」 エムスリーファイブは現実を認め、端末を

操る。「今、主映像に回します！」

そして、視聴覚設備に校舎の各所が映し出される。

どれも、男たちが防弾装備ボディアーマーと機関拳銃サブマシンガンで身をかため、校舎に浸透する光景ばかりだった。「直前まで反応がなかったのよ……！」マリオンが震え出す。「あの連中がこちらの監視装置の裏をかいて、今までずっと身近に潜んでいたって事……？」

「あれだけ準備期間をかけたんだ。当然だろう」

俺はマリオンの蓬萊会への悔りに呆れた。そして、

「こちらも≡シシオウシステム≡を使う」

「いきなり切り札を？」マリオンは少し躊躇ったが、「いいえ、仕方がないわね」と割り切る。

「マシンパワーとクラックツールではこちらが上だ。敵の指揮中枢は割り出せたらう？」

俺は≡シシオウシステム≡当直の【娘】エムフォーファイブに確認した。

そのエムフォーファイブは今までずっと黙っていたのだが、ここでははっきりと答える。

「はい。問題ありません」

「よし。第三条目で起動させろ」

「了解。第三条目で起動させます」

——Superior Hybrid Interceptor/Superseded Hybrid Irregular:Omitted Unit.

——SHISHIOU-system_Ver.9.10XSafe-mode/Condition, green. get set!

シシオウシステム・セーフモードを一言で説明するなら、電腦制御によるある種の自動狙撃システム——その最新鋭試作機だ。

どのくらい最新鋭かという点、このVer.9.10では発射時、誰も銃身に触れない程だ。端末からの鍵盤キーボード入力を制御中枢が処理、照準を異形細胞による人工筋肉が自動調整して、純粋な電気信号で発砲する。しかも、重量形状ともに成人男性の片腕を二回り大きくした程しかない。

何故俺がこんなものを持っているかという点、前の作戦でどうしても必要だったからだ。同時に二度とこんなものを使う事はあるまいと思っていた。そのため、まるで設定更新をしておらず、調整は難航。マリオンの手を借りても、今回の一件に最適化されているとは言い難い。

しかしそれでもなお——

シシオウシステムのヒトならざる運用を前提とした銃身は、破格の性能だった

約二キロメートル先の装甲車——蓬萊会が突入寸前に増大した通信状況から、それが敵中枢と自律判断。正確には通信車両か中継車両という診断結果だったが、優先排除の目標認定に変わりはない。

この『学園』校舎上部を改装した狙撃室から、自動発砲、完全命中。

装甲車は超高密度超質量特殊弾頭の直撃で爆発炎上した。

「？ 何であれ爆発炎上したの？」

マリオンが驚愕と疑念の視線を向けてくるので、俺は思わず目を逸らした。

「……ね、燃料に引火でもしたんじゃないのか？」

「いや、だってあれはあくまで『銃弾』でしょう？」

「特殊な弾頭だ」

「でも、少なくとも化学的な焼夷弾の形ではなかった。ああいう車なら対策もされているかもしれないし、この辺りの気温は低い。なのに偶然火花が散って、気化していた燃料に引火？ 出来すぎじゃない？」

「だから、特殊な弾頭なんだよ」

「だから、どういう弾頭なのよ」

「……多少の障害物を貫通できるように加熱投射する設計の超高密度超質量特殊弾頭だ。目標命中時に特殊な反応して、高温を出す事もある」

「そんな高密度な弾頭って、ウランとかプルトニウムみたいに……」

「連鎖反応は起こさん」

「じゃ、やっぱりあれは核……」

「特殊な反応だ」

ただ何と言うか、ちよっぴり質量がエネルギーに変換されるだけの話だ。

「……じゃあ、言い方を変えるけど、ちよつと大袈裟過ぎない？」

「仕方ないだろう。俺の手札なんて所詮は限られているんだ」

俺もできれば、もっと適切な弾頭を使いたい。また、シシオウシステム自身そのための換装可能な設計だ。しかし、交換用の部品が手元にない。物理的にない。これはどうにもならない。

「だからあの弾頭を使うしかない」

「……『屠龍の技』ね……」

マリオンは呆れていたが、俺は俺で冷や冷やだった。実のところ、あの SHISHIOU-

system_Ver.9 は試作機もいいところで、本当に使い物になるかは怪しい代物だったのだ。

「エムフォーファイブ、シシオウシステムに異常はないな？」

「え、はい。異常なしです」エムフォーファイブは不思議そうに答えた。「あの第二射は……？」

と、『何故命令をくれないのか？』と言わんばかりの容子だった。

——それでも動作自体は安定しているか……。マリオン様様だな。

何しろ、前の作戦では一発撃つ度に再起動が必要な有り様だったのだ。マリオンによるシステム調整の素晴らしさがよくわかる。

「……よし、第二射以降を許可」

「了解」

命令に従い、シシオウシステムが次々と敵を撃破していく。

順調で一方向的で無慈悲だった。

最初の指揮車辺りはともかく——いや、人間が乗っていた可能性も高いが——それらをあらかた無力化し終わると……。

次は中身の人間が目標になる。

木陰に隠れていた者がその樹木ごと撃ち抜かれる。それを見た者が決死の覚悟で校庭を駆け抜けようとして、やはり撃ち抜かれる。

いずれも間違いなく即死である。

しかも弾頭の性質上、撃ち抜かれると、体幹に大きな穴があき、四肢が遠くに飛び散る。映像越しという事もあって、まるで冗談の様な光景だ。

ただ、現場にいるものにすれば、まさしく地獄だろう。そして、

「……これは効いているな。動きが明らかに鈍っている」

「やはり、そうなのですね」

俺が指摘したのはシシオウシステムの有効範囲である校外の敵の動きではない（というか、そちらは射程内のほとんどを殲滅し終えている）。

シシオウシステムの有効範囲外である校内の敵の動きが鈍っているのだ。

このシシオウシステム・セーフモードはあくまで狙撃システムである。懐に入られては使えない。だから、校内に侵入済みの敵は、シシオウシステムの餌食になる事はない。

しかし、それでも校外がほぼ全滅という状況だ。平静を保てる方が珍しい。第一、指揮系統を破壊したのだ。心の平静を保てるも、身体を適切に動かせるはずがない。

「……よし。まず、東校舎の敵を攻める。詳細はヴァイタルスーツ付属端末に今送信した。ただし、深追いはするなよ」

俺の指示に【娘たち】の戦闘要員が一斉動く。が、マリオンが小声で俺に囁く。

「それだと、西が手薄になるわよ。特にあそこには『生物室』が……」

【娘たち】には実戦経験がない。あれもこれもとさせる事は出来ない。ここは割り切るしかない。戦力の分散を避け、敵を各個撃破する。何よりこれは敵が混乱している今しかできない」

敵が冷静さを取り戻し、指揮系統を回復させれば、各個撃破など不可能になる。俺達が東に戦力を集中すれば、その事を東の蓬莱会が西の蓬莱会に連絡し、急所になった西から攻められる——そんな風になる。

だが、敵が混乱している今なら、そんな有機的な連携は不可能だ。

「逆に言えば、校舎に侵入した敵を掃討する機会は今しかない」

「……そうね、その通りだよ」

マリオンはあっさり引き下がった。いや、元々、この程度の理屈は理解していたはずだ。だからこそ、小声で訊ねてきたのだ。だが、問いかけずにもいられなかった。

——そこはやはり初陣という事か……。

気丈に振る舞っていても不安だったのだろう。

同時に俺も不安になった。

あの【娘たち】は人間を機械的に撃てるように訓練してある。しかし、初めての实战で命令通り動けるかは未知数なのだ。

そう思って、校舎や端末からの監視映像を凝視していると……。

十五時間目

しかし、東校舎では【娘たち】が《蓬莱会》ほうらいかいを一方的に蹂躪していた。

金髪美少女達は命令通りに移動し、訓練通りに発砲し、男達を次々殺していった。

——従順優秀とはわかっていたが、こうも露骨だと不気味だな……。

男たちも武装しているし、訓練もしているはずだ。が、彼らは混乱から立ち直れぬまま、銃弾にその身を裂かれていく。

「まるでゲームね」

マリオンはぼつりとつぶやいた。

「そう喻えられる事は多いな。生憎、俺は詳しくないのだが……」

それでも、現代戦がそういった娯楽と酷似——正確にはコンピューターの活用で相互に

影響——している事は知っていた。

実際、将棋シヤトランジをやっている気分になるのだ。何故なら、ヴァイタルスーツや校舎各所の監視装置で状況把握し、情報連結された端末経由で【娘たち】へと指示を出し、敵を撃破しているからだ。校舎内という閉鎖空間で、敵の指揮系統が機能せず、敵の状況把握が不十分で、味方の銃弾が敵の防弾装備を撃ち抜けるとならば、尚の事である。【娘たち】へ、敵の死角に移動した上で、撃つ様に命令すれば（そして、校舎の様な屋内で一方的に状況把握と情報伝達ができるなら、それは容易いから）、ほぼ確実に先手必勝となる。まさに将棋だシヤトランジ。あるいは先進国の装備で統合処理された作戦を遂行すれば、皆似た様な錯覚に陥るのかもしれない。

——問題は現実には人が死ぬという事だが……。

とはいえ、それを口に出す事はなかった。酷い話だが、あの【娘たち】にゲーム感覚で動いてくれた方が、戦果は上がるのだ。

——いや、それにしても……。

あまりに一方的な蹂躪劇にマリオンですら、疑念を抱いた。

「今のところ、こちらの人的被害は零……これって、蓬莱会があくまで【娘たち】の確保優先だから、迂闊に撃てないって事？」

「ああ、それもあるだろうな」

だが、それだけではあるまい。

実際、《蓬莱会》は【娘たち】と接敵してもなお、銃口を向けるまでに数瞬の間がある。しかし、その動機はもっと始原的な感情に見えた。

——多分、年端もいかぬ少女を撃つ事自体に抵抗があるのだ。

それもとびきり見目麗しい少女たちだ。それが美貌をさらし、金髪を振り乱させている。だから、彼らは躊躇う。俺は何だかんだで、【娘たち】をあの裸に近いヴァイタルスーツ姿で戦場に立たせた。それはその躊躇に付け込もうとしたからだ。

元々、旧《荒夏》の女性兵士には意図的に色香を振りまくところがあった。人口比的に全面戦争では分が悪いので、それを回避する広報上の理由だったというが……。

——実戦でやらせた俺はより悪質かもしれんな。

同時に暗鬱な気分になった。この光景が世界の縮図にも思えたからだ。端的に言えば、豊かな民が貧しい民を返り討ちに行っている構造である。

金があるから、強く美しい精鋭部隊は、自分達に豊かさを与える今の世界を守りたくて。金がないから、弱く醜い革命組織は、自分達に貧しさを強いる今の世界を変えたくて。

しかし、金の有無は装備や錬度の差に繋がる。
だから、金持ちはその力で貧乏人を叩き潰す。

美しい【娘たち】が醜い《蓬莱会》を撃ち殺していく光景は、まさしく、そんな世界の縮図に思えたからだ。

「……………」

とはいえ、感傷に浸っていられるほど、甘くない。

蓬莱会が躊躇うのもあくまで一瞬の間だ。勿論、その一瞬で大きな打撃を与えはした。
しかし、隣の仲間が殺されれば、敵の頭も切り替わる。

第一撃は完全に【娘たち】が主導権を握ったものの、すぐに《蓬莱会》が明確な反撃を始める。

元々の錬度にそれほど差があるわけでもない。《蓬莱会》側が容赦なく発砲さえすれば、一方的な展開にはならない。少なくとも、敵の弾幕は【娘たち】の行動を制限する。

勿論、【娘たち】は【娘たち】で、地形を把握した上で待ち伏せである。これも簡単に被弾はしない。

だが、互いに撃ち合っていて、こちらだけが無傷とはいかない。

永遠に思える数分の膠着の後――。

「え、エムスリースリーが被弾しました！」

エムスリーファイブの報告にマリオンの顔が青ざめる。

「そ、損傷箇所は？」

「み、右腕です」

「なら、命に別状はないわよね？　そうよね？」

マリオンの口調は卑しく媚びるようなものだった。

エムスリーファイブにすれば、初めて見る母の顔だったのだろう。「ど、ドクター？　」とこちらはこちらで困惑しきっている。

「落ち付け」先程の威勢はどこへ行った――という台詞を俺は呑み込む。「こういう時のためのヴァイタルスーツだろう？」

「……………」

が、マリオンは歯ぎしりと共に頭を切り替えたらしい。自ら端末に向かい、被弾者の娘エムスリースリーの生体情報ヴァイタルデータを確認し、分析を始める。

――こうでなくては困る。

何しろ、この中で最も医者に近いのがマリオンなのだ。俺も応急処置の経験は多いが、マリオンほど体系的な医学に精通してはいない。加えて、俺は指揮をやらねばならんし、

マリオンほどタマゴロモ繊維からの記録読み取りに慣れている訳でもない。

だから、

「ショック死に繋がるような生体信号は出ていない。念のため、鎮静剤を注射。おそらく右上腕は綺麗に折れてるけど、それだけにくつつきやすいはずよ。ヴァイタルスーツそのものを形状記憶化させて、添え木にするわ。そのまま後方へ搬送して！」

という指示はマリオンにしか出せないだろう。

俺はマリオンが落ち着いたところを見計らって、声をかける。

「ライフル弾でなかった事が幸いしたな」

「……タマゴロモ繊維さまさまね」

「しかし……これは敵の狙い通りかもしれんぞ……」

「どういう事？」

「今のに限らず、敵の武装は機関拳銃ばかりで、突撃小銃が見当たらない」

「いや、あたしそんなのパツと見じゃ見分け付かないんだけど……画質も良くないし」

「とにかく、敵の武装には機関拳銃が多く、突撃小銃がない。発砲音からもこれは明らかだ」

「だから、わかんないってば……」

「俺はこれを蓬莱会が屋内での取り回しを優先した結果だと考えていた。校舎に侵入さえしてしまえば——実際それには成功しているし——狭い室内での戦いになる。だからこそ、長距離射撃向けの突撃小銃ではなく、近距離戦闘向けの機関拳銃を選んだんだ。だが、今時の防弾装備は拳銃弾では撃ち抜けない。実際、ライフル弾を用いている【娘たち】が《蓬莱会》を射殺し続けているのに対し、拳銃弾を用いている《蓬莱会》は【娘たち】を射殺できなかった。……いや、しなかったというべきか？」

そのために突撃小銃ではなく、機関拳銃で突入したのかもしれない。

仮に自分達が少女達に殺されても、自分達が少女達を殺す事がないように。

「……連中の目的はあくまでもあの【娘たち】の回収だから、不殺を己に課していると？」

「……」

タマゴロモ繊維の情報自体は《蓬莱会》にもあるはずだ。秋田はその目で見てもいる。工夫する時間があれば、防弾装備になる事もわかるだろう。……穿った見方をするなら、準備に時間をかけたのには、俺達が工夫するのを待つ意味もあったのかもしれない。

あるいは——、

「奴らは生身で対人地雷の役割を果たそうとしているのかもしれない」

「……意図的に殺傷性を抑え、死人よりも怪我人を増やすってやつ？」

「そうだ。戦死者は復讐を煽るが、傷病者は厭戦を引き起こす。実務的にも戦死者は放置できるが、重症者はその手当てに二名を拘束せざるをえない。勇敢に戦った者を見捨てる様では、兵士が付いてこなくなるからな。その結果、一発の弾丸で敵三名を同時に無力化できる。有名な話だよ」

「それはそうだけど、これじゃ自爆テロじゃない……」

マリオンは陰鬱な顔を隠さなかった。

わからんでもない。この役割を対人地雷のような機械ではなく、生身の人間がこなしているのだ。【娘たち】を生きたまま捕えるという目的のため、合理的に作戦遂行しているのはわかる。だが、その目的に自身の生命の保全はまるで含まれていないのだ。

「命の値段には差がある——ということだな」

皮肉な話だ。マリオンは誰よりも【娘たち】の価値を高める事に努めてきた。しかし、その価値を最も認め示しているのは、マリオンではなく蓬萊会の名もなき男たちらしい。【娘たち】を取り返すために、自分たちの命を消耗品として使い捨てる程に。

「今時『死兵』だなんて……」

マリオンは東洋的に評した。

古より『避けるべし』と伝えられた概念だ。そして近代戦でも、こういう状況になれば、その力は侮れない。

エムスリーファイブが再び報告の声を上げる。

「に、西・校・舎、第二防衛線に接触されました！」

「ちっ」

俺は思わず舌打ちした。

「いきなり、第二防衛線？」

マリオンもこれには驚く。

「西側が手薄とはいえ、何でいきなりそこまで敵が浸透してきているの？」

「迂回された」俺は情報の断片から断定する。「こちらの狙いと動きを読んだんだ。その上で東側が押されているよう見せかけつつ、撤退する振りをしながら迂回、背後の弱点を突いたんだ」

「敵の指揮系統は無力化しているんじゃないの？」

「対応策を構築したんだろう」

「はぁ？ もう過去形？」

「具体的にどうやったかは分からん。だが、元々、シシオウシステムも『荒夏』の産物で、

蓬莱会はその荒夏事変を潜り抜けている。元々、その手のノウハウを持っていたとしてもおかしくはないんだ」

「だからって、この短時間で？」

「……いっそ、セーラー服でも着せればよかったか？」

「はあ？」

「そうすれば、連中がより躊躇ってくれたかもしれん」

「……」

俺は言ってから悔やんだ。「……冗談だ」

「おもしろくないわ……」

そう言って、マリオンは黙り込む。俺の指示を待つという事だろう。

「自動防衛装置は？」

「正常機能しています。ですが、長く持つとは……あ、既に半数が無力化されています」

「例の《荒夏》思想というやつか……」

良くも悪くも《荒夏》は人間的で進歩的な集団だった。よって、単純労働や肉体労働は多少割高でも積極的に機械へ置き換えていた（当然、これは大量の失業者を生む。だから、ネオラッダイト論者なども荒夏を嫌ったのだが）。各種設備への《異形》技術の投入等がその典型で、その省力化された環境ゆえにこそ、俺たちはこの学園に引き籠もる事も立て籠もる事もできた。

ただし、同時に、《荒夏》は、人間的な集団だったので、自律兵器による殺人は嫌った。シシオウシステムに殺された者にすれば、偽善ですらない。まさに欺瞞だろう。しかし、あれも一応引き金を——電気信号経由とはいえ——人間が引く事を前提としており、だからこそ、強力な殺傷力を保持している。

逆に、校舎の自動防衛装置は豊富ではあるのだが、その威力は著しく限定されている。蓬莱会のような連中が本気になれば、時間稼ぎにしかならない。それも長くは持たない。ただ、俺が考えをまとめる時間は稼いでくれた。

「よし。基本、東側はこのままでいい。元々優勢なんだしな。手が空いている者……は、いないと思うが、無理矢理にでも人員整理して、四名捻出しろ。そいつらに西側通路の援護に回せ。それで廊下は抑えられるはずだ」

「西の中庭ががら空きよ。位置的にシシオウシステムでは狙撃できないし」

「だったら、人間が狙撃すればいい。ちようど、中庭にはその空間がある」

「それって……」

「俺がやる」というか、俺以外にもう駒こまがない。

改めて、そして手早く自分の装備を確認する。

軍用狙撃銃のMSG90。近接用機関拳銃のMP5K。予備拳銃でUSP。
調達の都合でH&K尽くしだった。珍しく高級品揃いでもある。
俺は慣れない手触りに妙な気分になる。

——このMSG90は『メツサリーナ』辺りに持たせるべきだったか？

何故なら、メツサリーナことエムツースリーは狙撃の才能なら、俺よりも上だからだ。
それは短い訓練でもはっきりとわかった。

——いや、エムツースリーだけではない。

例えば、エムファイティーンは極めて手先が器用で、ピアノからピッキングに至るまで
芸術的にこなす。工兵としては最適な人材だ。

例えば、エムスリーフォーは『対空上段蹴り』はおろか、『水平錐揉み回転両足蹴り』
までできる。そんな凄まじい運動能力の持ち主だ。

例えば、エムシックスツーは「娘たち」に共通する知的な冷静さの中に、好戦的な程の
闘争心を秘めている。まだ十一だが、俺も模擬戦闘では何度もひやりとしたくらいだ。

皆、優秀で可能性に満ちた若者たちだ。

——……俺も呪われたか……。

この娘たちの行く末を見たい。そのために、目の前にいる男たちの皆殺しもやむを
得ない。そんな欲求は呪いと呼ぶに相応しい。マリオン自身も縛り付けている≒マリオン
プランの呪いだ。

だが、皮肉にも、その金髪碧眼美少女は俺を信用していないらしい。

「私があなたの単独行動を許すとお思いですか？」

エムイレブンはずっと黙っていたが、ここでそんな口を叩いた。

「いや。できれば、観測員が欲しい」俺は苦笑した。「背中を任せる。出来るな？」

「当然です」

彼女は余程興奮していたのだろう。柄にもなく、頬を赤らめていたのだった。

十六時間目

中庭を見渡せる教室——。

そこで俺はH&KのMSG90を構える。

最後に零点規正した時は300メートルだった。この校舎内のような戦闘だと、標的の

大半は近過ぎて狙い難い。

だから、一番、遠い相手を狙う。おあつらえ向きにそいつはちようど距離300にいた。大雑把な目測だが、地図の記憶とも一致している。だから、間違いない。

——落ち着け、姿勢と呼吸が先だ。

次に照門と照星で、照準を合わせる。視力はさほど良くもないが、どうせ、距離300以内だ。スコープも外してある（つくづくPSG1ではなく、このMSG90A1にしておいて正解だった）。

——最後に引き金を絞る間合いだ。

一発目外れ。

だが、これで基準ができた。

すぐに二発目を放ち、これは右足に命中。

——息継ぎ、気抜け、狙い、指掛け、引き……基本を忘れるな。

そう己を戒めつつ、少しずつ狙う相手の距離を近くのものにする。前の着弾を基準に、直観で照準を修正。

そして、発砲。7・62mmNATO弾が着弾。

対象の戦闘力を奪った事を確認すると、その感覚を忘れないうちに次の標的へと銃口を向ける（こういう状況では、長年の経験から、直感的に微調整していくしかない）。

それを繰り返している内に、気が付いたら弾倉が空になっていた。

——セミオートマチックの弊害だな……。

射的に夢中になって、何発撃ったかをちゃんと覚えていなかった。引き金を引くだけで、次弾が装填されるセミオートマチックの弊害だろう。いや、俺はボルトアクションなど、使った事のない世代だが……。

「ええと、弾倉は二〇発だったはずで、最初の一発を外したから……。俺は十九人無力化したのか？」

俺は隣の金髪美少女に確認を求める。

だが、エムイレブンは「え……」と呆けていた。

「おい、何のための観測員だ？」

「は、はい。十九人に命中しました……」

「しっかり確認してくれ」俺は弾倉を交換しながら、念を押す。「俺は被弾させただけ。相手は死んでいない。ちゃんと無力化していないと危険なんだ」

「は……？ 全員死んでいない？」

「急所は外してある。さっきのエムスリースリーと同じでショック死の可能性はあるが、

そうでなければ、全員、まだ生きているはずだ」

「急所は外したって……」

「貴様、さっきの話を聞いていなかったのか？」俺は少し苛々してきた。「こういう時は、あえて殺さずに無力化した方が効率的と言ったろう」

「では、すべて意図的に……」

「生かしておけば、敵もその手当てに人員を裂く。実際、被弾した連中もまだ生きているだけだ。放置すれば、失血死するだろう。しかし、まだ生きてはいるんだ。反撃してくる可能性はある」

そう言った途端に、着弾音が身近に響く。

よく見ると、被弾した蓬萊会の一人がこちらに銃口を向けていた。

「ほらな」

俺は——大人しくしていればいいものを——という言葉を読み込んだ。いくらさほどの距離ではないとはいえ、被弾した状態で機関拳銃サブマシンガンを撃つても当てるのは難しい。そもそも、向こうがこちらの正確な位置を特定できているとは思えない。

だから、実際外れた。が、やはり撃ち返してきたのだ。

「生きている以上、危険なんだ。完全に無力化しておかないと」

俺はそう言って、軍用狙撃銃スナイパーライフルのMSG90を反撃してきた奴に向ける。

発砲。命中。その男の機関拳銃サブマシンガンは粉々に砕け散った。

「……い、今のも意図した結果ですか……？」

「それより、他に危険な奴がいらないかに注意しろ」

「は、はい」

俺は俺で周囲を警戒する。この調子では、エムイレブンは頼りにならない。新兵の初陣など、こんなものだが……

「あ……」

と、エムイレブンが小声を漏らした。その理由は俺にもわかった。

中庭で『無力化』された蓬萊会の男が、別の蓬萊会の男に助け起こされているのだ。助けられる側が嫌がる素振りを見せ、助ける側に恐れの色がある。

互いに絶好の的だという自覚があるのだ。それでも、仲間の命のため、己の命を賭けている。

——まさに……勇者だ。

これにはエムイレブンですら、感じるところがあったらしい。

「あのっ、あれはっ……」

「あれは……放置する」俺は脳裏に浮かんだ『友釣り』という発想を捨てた。「負傷者を救助回収中の者は狙わないという法則を確立させる。これまでの戦術から考えて『兵士の値段』がさほど高くもない連中だ。ここで手を出せば、≪蓬莱会≫も負傷者は見捨てるという割り切りを確立させてしまうかもしれない。あるいは負傷者を『安楽死』とかもな。そうなったら、手に負えない。見逃した状況は監視装置で録画してあるし、後で政治的に役立ちもするだろう」

「は、はい……！」

——口数が多いと思われたか？

俺はそう思いながら、「一応、念押しはしておく」と再び狙撃に集中する。

狙いは蓬莱会の手を離れた他の機関拳銃だ。

俺は慎重に引き金を絞る。

それを手早く三回繰り返す。

人体よりは小さい標的だったので、自信は無かったが、今度は距離の近さが幸いした。

三丁狙って、三発放ち、すべて初弾命中した。

隣のエムイレブンは何やら息をのんでいるようだったが、重要なのは≪蓬莱会≫の男に俺の『意図』が伝わった事だ。特に仲間を助けようとした男は、泣きながらも、俺の方を向いて、頭を大きく上下に動かしていた。

——……戦場で感傷的になるのはいい事ではないんだがな……。

しかし、泥沼になるよりはマシだろう。

「よし、念のために移動するぞ」

「最初から、マスターが出ていれば、一瞬で終わっていたのでは？」

移動先の教室で、エムイレブンがそんな馬鹿を言ったので、俺は

「馬鹿を言うな」

と率直に指摘せざるを得なかった。どうせ、補給待ちだ。この小娘の危うい蒙を啓いてやらねばならない。

「確かに狙撃手は近代戦でも条件次第で一騎当千足り得る。……が、逆に言えば、それはあくまで条件次第という事だ。だから、まずその条件が揃っているか、揃っていないか、どう揃えるかが、重要だった」

そして、足りなかった条件は敵戦力の詳細情報だった。例えば、敵の主兵装が機関拳銃

だとわかっていなければ、こうも大胆に狙撃を実行し、成功させる事は出来ない。

「我々が威力偵察をこなしたからこそ、今のマスターの戦果がある？」

「飲み込みがいいな」

俺は少し感心した。だから……少し迷ったが、もう一つ説明しておく事にする。

「貴様ら三十六体の【娘たち】は『自身の命すらもゲーム感覚で客観視しながら、機械的・昆虫的・条件反射的に行動できるプロの兵士』として育てた。そういう兵士は優秀で、生存率が高く、だからこそ、元々の《マリオンプラン》との親和性も高いからだ。俺自身、この類を自認しているしな。勿論、これが実戦で機能するかは不安だった。が、結果的に及第点だったな」

「先進国で理想とされ、育成される兵士の型ですね。しかし、蓬莱会は違うと？」

「《蓬莱会》はおそらく『戦死する事はイデオロギーに殉じる事だから、むしろ喜ばしいと思える狂信者型の兵士』を自認しているな。勇敢だが、生存率が低い——発展途上国に多い型だ。自分達の命の値段をその程度に見積もっているんだろう。そして、一応だが、その通りに動いている。危険にわざわざ飛び込み、実際にバタバタ死んでいったらう？そして、一応はその手の兵士とわかったから、先読みして、有利な狙撃が可能だった」

「……『一応』を繰り返す理由は……」

「そうだ。現実の彼らは狂信者ではない。自分自身の生命を自分自身の判断で使い捨てる事は出来ても、目の前で苦しむ仲間を見捨てる事はできない。立派な人間だよ。とても、真つ当な人間だ」

「……」

その証拠が先程の勇者の姿だ。

自分達の命に価値なんてない。そう思いこもうとしているのだろう。だから、死ぬ事ができる。……しかし、そこまでだ。死なせる事は出来ない。当然だ。彼らは兵士であり、戦士である。現にこうして、きちんとした作戦行動を実行できるのだから。

「……立派な、真つ当な人間が相手なんだ。ならば、この戦いも終わらせる事が出来る」
口にして、少し悔やんだ。俺が指導した【娘たち】は、その人間を何十人と殺している。俺自身が撃った相手も、死んでいないだけで、元の生活には戻れないはずだ。

だからだろうか、俺の反応は遅れた。

廊下に人影が走る。

とっさにエムイレブンが銃口を向ける。観測員スポッターとして正しい態度だったが……。

「撃つな！」

俺はそれを制止した。

「味方だ」

その銃口の先には小柄な金髪碧眼美少女がいた。

「予定していた補給だよ」

「は、入ってもいいですね？」

少女の声はさすがに怯えていた。対するエムイレブンはたっぷり汗をかき、震えたままである。

「ああ、入れ……」

俺が告げると、金髪碧眼美少女の二人——多分エムファイブワンとエムファイブツーがおずおずと教室に入ってくる。

彼女たちが運んできた弾薬に、俺は駆け寄ったが、エムイレブンは動かない。

俺は発砲したが、エムイレブンは発砲していない。だから、エムイレブんに補充すべき弾薬はない。合理的に解釈すれば、そういう事になるのだろう。

——……が、妹へ銃口を向けた姉としてはな……。

そこで俺はふと鼻腔をくすぐる香りに気付いた。

「この甘い匂いは……？」

「美少女の香りでしょうか？」とエムファイブワンかエムファイブツーが言う。

「どこか懐かしい、糖蜜と小麦の香りだ……」

「……はい。雰囲気と和ませようとした私が愚かでしたね……」

そう言ったエムファイブワンかエムファイブツーが弾薬の影から砂糖菓子を取り出す。

「栄養補給です。朝食がまだだろう——というドクターの言い付けで」

「そうだな。たとえ食欲がなくなるとも、完全な空腹では判断力が鈍る」

「……正論ですね」

俺の言葉に、エムイレブンは形式上反応した。彼女はそれを手でつまみ、

「……小麦菓子の揚げ物でしょうか？」

第五世代の影響だろうか、俺も珍しく悪戯心を起こした。

「エムイレブン、喰ってみろ」

「え、あ、はい」

エムイレブンは素直にかぶりつき……閉口した。

「……な、何なんですか、これ？」

「カタールイフだ。つべこべ言わずに喰え」

「……？」

エムイレブンは理解の不足と砂糖の甘みで目を回していた。

「アラブの砂糖菓子だ。今回は乳脂肪だけだが、本来は干し葡萄や椰子の実なども小麦の皮で包んで揚げ、糖蜜をかける。…断食月の翌朝にもよくお袋が作ってくれたよ」

「そ、それで、こんなカロリーの塊なんですかね」

「だが、極限状態では必要なものだ。糖分は思考に不可欠だからな。しかも、冷めているから、甘みも程々だ。これなら、珈琲カフワがなくても、三個は食える」

「出来たて熱々だと、もっと凄いとということですか？」

エムファイブワンとエムファイブツーの二人はその反応を予測したのだろう。目を回す長姉エムイレブンをくすくすと笑っていた。

「…すべては母親の気づかいだ。無駄にせず、口に入れる」

マリオンは栄養管理のため、高タンパクは与えても、高カロリーは与えなかったはずだ。そのため、この少女達の口には慣れないだろう。しかし、その必要性は理解したらしい。歯を食いしばって、口に入れる。そして呟く。

「でも…これがマスターの故郷の味なんですかね？」

「それがどうした？」

「いえ。母心ではなく、女心だろうと愚考しまして」

「はあ？」

「いいんです。わかっていたことですから…」

結局、俺はその後も合わせて、50人を無力化した。

そして、エムイレブンが一発も撃っていない事で、有害無益に焦り出した頃――。

停戦要求が『蓬萊会』から、送られてきた。

十七時間目（最終回）

「まとめると、こういう事だな」

俺はマリオンとエムイレブンの前で状況を整理した。

- 1…【娘たち】の養育権はドクターIIマリオンに移譲する。
- 2…同様にプラン成果物についての権利証もドクターIIマリオンに移譲する。
- 3…【学園】については『蓬萊会』の専有物とする。ドクターIIマリオンは立ち退く事

（当面の生活費等が必要なら、『蓬萊会』が便宜を図る。）

4・立ち退きにあたって、校舎内の設備その他については現状維持に努める事。

「これが『蓬萊会』の出してきた条件ですか？」

「悪くない。よく短時間でここまでまとめたものだ」

しかし、マリオンは不満げだった。

「そうかしら？ 結局あたしたちにここを出て行けと言っているのよ」

「だが、現状の追認に過ぎないのではないか？」

俺は事実を淡々と指摘する。

「考えてみる。生物室を中心とした西校舎はほとんど占拠されているんだぞ」

「……」

マリオンが沈黙した。その正しさを認めている証だった。

その後、結局、東校舎は「娘たち」が守り切った。中庭は俺が守りきった。

しかし、西校舎からの廊下は「娘たち」だけでは手が足りず、俺も手を貸す事になった。

挙句、西校舎そのものは第二防衛線に喰い込まれたままである。

すなわち、生物室を中心とした西校舎は『蓬萊会』が実行占拠しているのだ。

「交渉を粘れば、生物室以外はこちらのものとする事は出来るかもしれん」

俺は俺達がまだ戦える事は認めた。

結局、蓬萊会は「娘たち」の確保という目的に縛られている。その目的をまだ順守するつもりなら、これまでと同じく互角以上に戦えるはずだ。

実際に当初俺が恐れていた強力な化学兵器の投入はなかった。しかも、『空調室』は、まだこちらが確保している。マリオンと設備と資材が揃っているから、むしろこちらから化学兵器を投入できる程だ。

そして何より、

『4…立ち退きにあたって、校舎内の設備その他については現状維持に努める事』——
このその他というのは、要するに捕虜は丁重に扱えと言っているんだろうしな」

俺は負傷者を救助回収中の者は狙わなかった。

しかし、負傷者の救助回収を無条件に認めただけでもない。そもそも、俺はあの中庭で大量の負傷者が出したのだ。『蓬萊会』が放置せざるを得なかった負傷者も多く、それは俺達の捕虜となっている。

『蓬萊会』は仲間を見捨てたくはない。生物室さえ確保しておけば、AHAへの面目は立つだろう。だから、それ以外の譲歩を引き出すのは不可能ではない。が、そこに意味は

あるのか？ 撃ち合いをした連中が隣にいる『学園』で暮らしたいか？」

あるいは、この先《マリオンプラン》と《蓬莱会》は融和的になるかもしれない。だが、ほとぼりを冷ます時間は必要だろう。

「でも、『生物室』は……！」

「【娘たち】の生産設備だったというところか？」

「……バレバレか……」

それが答えだった。

「物理配線の整備も俺が担当していたんだ。あそこに大量の電力が必要なのはわかるさ。

……大型コンピュータでもあるのか？」

「ええ、そうよ。超大型の演算結晶、遺伝情報からの全細胞表現型予測シミュレーター。

それと物理的な染色体一式を連動させられるように、馬鹿でも使えるようにしてある

シーケンサー分析装置と、対応するセンサライザー合成装置も」

マリオンは音楽を奏でるように語った。

「俺に技術的詳細はわからん。だが、そこに【娘たち】の生産記録も残っているとすれば、そこさえ占拠していれば、【娘たち】の再生産も可能か？」

「純技術的には他にもいくつか条件が必要になるわ。そもそも、あれは【娘たち】と同じDNAを合成するだけ。そこから、実際に産み育てるには『母親』が不可欠よ。……でも……」

「《AHA》なら余裕で、《蓬莱会》でも、その調達は可能だろうな。そして、だからこそ、ここで手を引く決断が下せたわけだ」

文字通り、《蓬莱会》は身命を費やした。それに相応しい代価がなくなれば、納得できまい。

——いや、たかが、遺伝子のために命を賭け、手足を失って納得できるというのは……。むしろ、連中の自己評価の低さには唾然とするしかない。

「ちなみに、生産記録だけでも回収はできないのか？」

「無理。元々旧式の先進機材だから、現行の汎用機とは互換性がない。データがヒモ付けされている事も機密保持には都合だったから、放置されていたの。あたしもこの数年、回収に挑戦してみたけど、いくつかの複製をとるのが精一杯だったわ」

「結局、この条件を呑めば、《マリオンプラン》は連中の手に渡るか」

「……」

マリオンは露骨に歯を食いしばった。

俺はそこで意地悪を試してみる。

「いっそ、物理的には破壊するか？」

「ふえっ……?!」

「《蓬莱会》の条件には背くが、誤魔化し様はいくらでもある」

「い、いや、そ、それは……」

マリオンはおろおろしていた。まるでいつもビクビクしていた少女の頃の様に。

「なんだ？ 蓬莱会の報復が怖いのか？ ……それとも、誰であろうとも、自分の研究を引き継いでくれるなら、その芽は摘みたくないと？」

「だ、だって、あれは……」

人類の可能性だ。

マリオンはそう考えているのだ。それを破壊するなど、想像すらできない。だからこそ、惑う。俺の何十倍、何百倍も聡明でありながら。

——こいつは結局『真理の探究者』なんだな……。

マリオンは学者になったのだ。あるいは元々、学者だったのかもしれない。

こういう時、軍人なら、破壊を考える。俺も広義の軍人である。それ故に当然、考える。考えてしまう。

しかし、マリオンは学者だ。破壊ではなく、創造を旨とする。だから、未来を破壊するなど、考える事すらおぼつかない。

そんな眩いマリオンは涙目になって呟く。

「……ヤヒヤーの意地悪」

俺は思わず、子供の頃の様にケラケラと笑った。

「おほん」と、エムイレブンはそこでワザとらしい咳払いをした。

「じゃれついてないで、今後の事を話し合しましょう」

……こいつもしかして機嫌悪くないか？

何故か怖くなって、背筋が震える。俺は慌てて話を変える。

「そうだ。この後必要になる《蓬莱会》との細かい条件の擦り合わせは、エムイレブン、貴様に任せるぞ」

そのエムイレブンは眉を顰める。

「マスターが担当するのではないのですか？ 何だかんだで、秋田氏とは随分話があつていたようですし……」

「勿論、通信機で指示は出す。狙撃銃で監視もする。貴様じゃ、約束を守らせるのは難しいだろうからな」

「それなら、マスターが直接……」

「あいな……俺が顔を出して、もし狙撃手だとバレたら、罨り殺しにされるぞ」

「え……」

「……おい、マリオン、どういう教育をしているんだ？」

マリオンは「情操教育はヤヒヤーに任せるわ」とまた肩をすくめた。

「本物の狙撃手が自分は狙撃手だと滅多に明かさない理由がわかるか？」

「それは……」

「たくさん殺すんだ。報復が怖い。結果、味方からも敬遠される。巻き添えがありえるからな」

「……」

実際、友釣りなんてのはそれを利用する戦術である。

「逆に、貴様は一発も撃っていない。誰も傷付けていない。だから、適任なんだ」

「……もしや、そのために……」

「阿呆。偶然の結果を利用しているだけだ。他人を偶像化するな」

実は全く考えていたわけでもなかった。が、エムイレブンの過大評価が気になったので、俺は少し厳しめに言ってみた。

すると、エムイレブンは息を整え、慎重に言葉を選んだ。

「……では、確認しておきたいのですが」

「なんだ？」

「マスターは蓬莱会と取引したのでは？」

「……連絡を取り合う隙は、貴様たちが与えなかったろう？」

エムイレブンは監視を公言し、交代で俺に付きまとい続けた。おかげで……そのなんだ、年頃の娘と四六時中一緒で、心落ち着く暇もなかった。

「ですから、連絡を取らずに取引したのでは？」

「意味がわからない」

「言語ではなく、行動を以って、条件の擦り合わせをしたのでは？」

「……」

「マスターも蓬莱会の秋田も、一定以上の知性の持ち主です。ならば、相手の行動から、その意図を読み取り、互いに妥協点と最適手を探り合い、示し合わせる事も可能なのでは？」

「……それは推測だろう？」

「はい。しかし、論理的な整合性はあるように思えるのですが？」

「……」

俺は何も言い返さなかった。

「……とまで言われたよ」

『ははは。そういう側面がなかったと言えば、嘘になるのでは？』

「迂闊な事を言うな。繰り返すが、この会話は監視録音されているんだぞ」

俺は電話越しの秋田にはつきり伝えた。嘘ではない。現に隣でエムイレブンが眉を顰めている。

「俺の立場も微妙なんだよ。下手に《マリオン》達を刺激して、せつかくの停戦をふいにする発言は慎んでくれ」

『これは失礼。——しかし、それはこちらも似た様なものです。僕の隣でもファッション童貞の青森がジト目になっています』

「そんな名前を出されてもな」

『なら、覚えておいて下さい。今後、蓬菜会指導者はこの青森が務めますから』
「なんだと？」

『今回の襲撃は過激派の僕が強いたものです。穏健派の青森達が反対するのを押し切つて——ね。それがこうも犠牲を出して、失敗したのです。責任追及は当然でしょう』

「貴様が過激派だっただと？」

秋田は俺の疑念には答えず、説明を続ける。

『元々、青森は僕よりギャルゲーに詳しく、人望は得易い男です。イケメンファッション童貞の疑いさえなければ、もっと早くこうなってもおかしくなかった』

「……」

正直、俺にはよくわからない世界だったが、この交代劇は胡散臭い。

何せ、蓬菜会は【娘たち】こそ手に入れなかったが、《マリオンプラン》そのものは、無傷で手に入れたと言つてよい。成果としては十分だ。

——《蓬菜会》内部の過激派を抑えるための猿芝居だったのではないか？ あの襲撃も犠牲もこの交代劇も……。

『疑っている様ですが、青森の力量は確かですよ。僕がそちらの初弾で火だるまになっている間、青森が早く指揮系統を立て直してくれたんです。そのおかげで、我々は一応の戦果を得られたのです』

「……あの指揮車の中にいたのか？」

『ええ。命からがら、逃げのびましたよ。シシオウシステム……ですよ？ あれの発砲

基準が合理的な【無力化】ではなく、【殲滅】であったら、本当に死ぬところでした』
「……」

『あ、補足しておきますが、僕は今表向き生死不明です。青森への速やかな権力移譲にはその方が好都合ですからね』

「だから、俺達にも貴様の生存は知らないふりをしろと？」

『さすが。話が早いです』秋田は心底ありがたい声音だった。『僕もヤヒヤー・イブン||ザカリーヤーについては知らないふりをします。あなたにとっても、好都合でしょう？』
「どういう意味だ？」

俺は鎌をかけてみた。勿論、俺も俺の存在を隠蔽したい。理由は前述の通り、狙撃手というのは恨まれ、厭われるものだからだ。

——ただし、それは俺が狙撃手だとバレている事が前提になる。おそらく、俺の経歴を何らかの経路から、手に入れたのだろうか……。

と黙っていたら、秋田は素っ頓狂な事を言い出した。

『【神武不殺】という奴です』

「知るわけないだろう」

マリオンといい、秋田といい、日本人は漢字が世界で通用すると思っているのか？

『【周易】繫辞の一節ですよ。古之聰明叡知、神武而不殺者夫——古の聰明叡知、神武にして不殺の者か——ってね』

「だから何が言いたい？」

『中庭の狙撃手はあなたでしよう？』

「根拠は？」

『こちらの死者がゼロだったからです』

「……」

俺は何と言いつ返すべきかわからず黙り込んだ。

達成感がないといえば嘘になる。たしかに俺は——純戦術上の判断から——非殺傷での無力化を望み、俺の技能はそれを叶えた。……とはいえ、俺の狙撃で手足を失い、二度と元の生活に戻れない者が五〇人である。素直に喜ぶ事は難しい。そもそも、俺の指示で【娘たち】には多くの人間を殺させているのだ。

『ま、その辺りの理由を差し引いても』

秋田は胡散臭い明るさで言った。

『交戦という愚劣な決断に行き詰った僕達旧世代は消え去り、交渉という賢明な決断へと辿り至った青森達新世代が表舞台に立つ。素晴らしい話でしょう？』

「……そうだな。こちらにもエムイレブン等を表舞台に立たせる予定だ。実務面でも俺達の世代の——交戦を回避できなかった無能の——影響力は極力早く失われるべきだ」

『……同感です』

その一言は本心に思えた。何故なら

『何故……』

何故、皆、もっと早くこの結論に至れないんでしょう？——秋田が飲み込んだであろう台詞は俺にとっても本心だったからだ。

「……今後の話をしよう」

俺は頭を振って、頭を切り替える。

「悪いが、捕虜は今後の保険に取っておきたい。だが、こちらで確保している遺体は返送したい。どうだ？」

『荒川の兄弟ですね？』

「だから、名前を出されてもよくわからん」

『あなた方がこちらに来た時の受付二人ですよ』

「……ついでに聞いておくが、あの二人の遺体には訓練や事故のものとは思えない傷跡があつたんだが……？」

『ああ、虐待の痕でしょう？』秋田はあっさり言った。『火を付けた煙草を押し付けるとああいう痕が残るんです。背中 of 痕による文字列が気になりましたか？』

「俺は日本語が読めんのだが、あれは……」

『「ゴミクス」とか「チンポ」とかという意味です』

「……貴様らではないよな？」

『まさか。彼らの兄弟の産みの親の仕業ですよ』

俺は言葉を失った。遺体を確認した時のマリオンたちの様子——とりわけあの文字列を翻訳しなかった事から、おおよそ推察はしていたが……。

『お二人が来た時にも仄めかしましたが、この国にも貧困家庭はあるんですよ。そして、彼らは貧困の中で生まれ、児童虐待の被害者として、育ちました。あれはその証です』

「消す事だって、出来ただろう？」

『僕も提案しました。彼らも苦悩したようです。「お前達なんて、産まなきゃよかった」——そう言われながら、付けられた痕ですからね』

「だったら……」

この台詞は俺ではなくエムイレブンのものだった。

「……！！」

俺は無言でエムイレブンをぶん殴った。

黙っていると言う命令に違反したからだ。

エムイレブンは顔面に裏拳の直撃を受け、鼻と口から血を流す。

しかし、金髪美少女は抗弁をやめなかった。

「あんな……あんな忌まわしい痕は一刻も早く消してしまわなきゃダメです。提案？ 苦悩？ 馬鹿馬鹿しい。何故、即決できないのです？」

『それでも』と、秋田はこちらの異常事態に気付かないふりをして言葉を続けた。『あの兄弟にとっては《母親》だったんでしょうね』

「何が母親よ！ そんなのが『お母さん』のはずがないでしょう！」
エムイレブンは泣き喚いていた。

無理もない。エムイレブンをはじめ、【娘たち】三十六体にとって、《母親》といえば、マリオンに他ならない。そして、そのマリオンに文字通り、純粹培養されて、育てられたのだ。

それがその対極に位置する《母親》をいきなり見せつけられた。

錯乱するのも無理はない。

秋田は感情を抑えた声で続ける。

『悪いのはその母親ではない。貧困である。それが《蓬萊会》の公式見解です』

「……逆に言えば、そういう日本人の受け皿として、《蓬萊会》が必要という訳か？」

『国粹主義団体であるべきか否かはわかりません。ただ、確定している事実として、あの兄弟は小学校にすら、まともに行かせてもらえなかった。だから、彼らの学力は低かった。

政治的に正しい言い回しもできないくらいにね』

……思い出した。彼らは俺の事を生まれた国や肌の色で侮蔑したらしい二人だ。

『大量の移民との競争社会になれば、こういう日本人は確実に負けます。でも、こういう日本人を救うよりも、外国の貧困層を救う方が安上がりなのは事実です。だから、経済の効率や人権の平等を重んじるなら、こういう日本の子供は見捨てるべきです』

だが、この男はそれを見捨てられなかったという訳か……。

『頼みがあります』

「何だ？」

『遺体はできるだけ綺麗な形で……』

「ああ」俺は画像データを送信する。「こんなのでいいか？ 俺には日本人の感性がわからん。だから、マリオンと娘たちにやらせたんだが……」

『これは……ありがたい。もったいないくらいです』

秋田の感極まった声に、俺は苛々した。

「もったいないなんて言うな。わかるだろう？ 泥沼の報復合戦が嫌だから、懐柔しようとしているだけだ。別に遺体損壊が俺の宗教法に触れるからでもない。すべては打算だよ。殺した側の、殺された側へのな」

『それでも、です。これで彼らの人生に意味を与えてやれた』
「勇敢に戦って死んだ——と？」俺は使い古された台詞を並べた。

『彼らはね、生まれてから誰にも愛されなかったんです』

その言葉で俺は《蓬莱会》の本質に確信が持てた。

——《蓬莱会》があつさり『死兵』になれるのは、やはりそのためか……。

先進国で十分な教育と暖衣飽食の下で育った者は、あんな風には死ねない。素晴らしい人生を送ってきたのだ。これからも素晴らしい人生が続くと考える。だから、命を惜しむ。指揮をする側も、投入した教育費用を考えれば、使い捨てにはできない。実際、俺もマリオンも、【娘たち】を一名たりとも失わない事を前提に、作戦を立案し、遂行し、達成した。

しかし、《蓬莱会》はその逆だ。発展途上国——というよりも失敗国家で、貧困と艱難辛苦を強いられてきた者は、あんな風に死ぬ。いい事なんてない人生を送ってきたのだ。これからも生き地獄が続くと考える。だから、命を惜しまない。自分の人生と未来を客観的に分析した結果、ここで死んだ方が幸せだと判断するからだ。指揮をする側にしても、教育費用があまりかかっていないので、使い捨てにできる。そして実際に使い捨てにできた。

勿論、日本は先進国であり、失敗国家ではない。しかし、貧困自体は確実に存在し、《蓬莱会》の前線兵士たちには、そういった者達が多かったのだろう。

『実の母親ですら、彼らを愛さなかった。だから、僕らは彼らに居場所を与えようとした。日本人は日本人であるだけで素晴らしいという屁理屈でね。……正直な話、彼らが誰かに愛されるとは思えなかった。それは諦めていた。貧困と虐待しか与えられなかった彼らは、何よりも愚かで醜いからです。あんな男達を愛する女はいない。だから、諦めていた。……でも、それでも、最期にその汚れた遺体を《聖母》たちの手で美しく整えてもらえた。それだけでも、望外の喜びです』

「……大きく輝く眼差しおとめの美しき処女はまさに秘蔵の真珠の如く。これらは彼らの行いに對する報奨である——か」

『クルアーンの一節でしたか？ 正しき行いを成した者は死後に清らかな天女の愛を享受できるといふ』

「…：第五十六章だよ」

『僕も彼らも「日本人にありがちな、自覚をもたぬ仏教徒であり、神道のひかえめな賛同者」です。いかに慈悲深く慈愛遍くアツラーといえど、その恩寵賜る事はありません』

「そうか…：」しかし、こいつもこういうところはマリオンにそっくりだな。

『でも、その寓話の意味はわかります。いえ、今日わかりましたよ』

その秋田は少し涙声だった。

…：サラーム・アレイコム。汝の上に平安あれ。

俺はそう口にしかけて、やめた。

* * *

それから、一週間後――

俺とマリオンと【娘たち】三十六人は山奥の校舎に辿り着いた。

「これが新しい【学園】ですか？」

「な、中々趣おもむきがあるわねー」

エムイレブンが素朴な、マリオンが微妙な感想を漏らす。

俺がシャトルバスを五時間かけて運転した事に対する労いは無かった。むしろ、そんな辺鄙な場所に連れてきた俺への皮肉が強い。

「今時、木造校舎なんて残っていたんだ…：」

「雰囲気が学校と言うよりもテロリスト養成所に思えます…：」

「言うな！ 俺だって、そんな気がしているんだよ…：！」

辿り付いたのは福島県の過疎地、目の前にあるのは廃校になった二階建て小学校、老朽化の進み具合から、数十年単位で放置されていた事は明らかだ。

ちなみに、左右を見渡すと緑が広がっている。だが、それ以外には何もない。

耳を澄ませば、小鳥のさえざりが響き渡っている。だが、それ以外に音はない。

飛天市は何だかんだで都会だった。だが、ここはまさに対極の環境だった。

「それにしても斬新です。こんな合成映像の様な世界なんて」

「そうね、これも勉強の一環と思いなさい」

「…：言っておくがな。これで俺の金もコネも本当にすっからかんだからな」

一応、新興財閥オルガリヒのユロフスカヤには話を通してある。しかし、実際に資金援助が始まるとしても時間が要る。それまではここでしのがねばならない。

「しっかし、兎も羊もみんな見事に野生化しているわね」

「衛星からの情報ですが、井戸の水も川の鮭も確認しました。使えそうです」

「……燃料と医薬品を確認しておく」

俺はうんざりしながら、その場を離れようとした。

しかし、その背にマリオンが弾んだ声をかける。

「ちなみに、ヤヒヤー。解体経験は？」

「……兎ならある」

「そ。あたしは羊だけだから、後で相互補完しましょう」

「ドクター、マスター、その際は是非とも第一にご教授下さい。姉たるもの、妹たちへは、常に範を示し続けねばなりません」

エムイレブンはエムイレブンでどこか愉しそうだ。見れば、残りの金髪碧眼美少女も、新鮮な環境に興奮している。

「『マリオンプラン』はここから始まるという事か……」

俺の幼馴染の娘が金髪碧眼学園ハーレムで、そして、今日の苦難と明日への希望に満ち満ちていた。

「了」